

# 個人と社会との和解

## ——『墓場への闖入者』について——

A Reconciliation of Individual Man and Society

—Faulkner's *Intruder in the Dust*

花 本 金 吾

### I

『墓場への闖入者』*Intruder in the Dust* は、『モーゼよ、往きて下れ』*Go Down, Moses* 執筆後 6 年の沈黙を破って、1948 年に発表された。フォークナーが 6 年も沈黙を続けたのは、彼が 1926 年に『兵士の報酬』*Soldiers' Pay* で文壇に登場して以来、1962 年に『自動車泥棒』*The Reivers* を書いて、作家としての長い生涯を終える迄、後にも先にもないことであった。この沈黙が果してフォークナーにとって何を意味したのであったか、それは重くのしかかる苦悩の結果であったのか、それとも人間救済を常に求め来た彼が遂にその解決の鍵を握ったと思った為の安堵感による沈黙であったのか、或いは、たとえば不健康などといった、もっと現実的理由によるものであったのか、作品以外には、日記一つすら僕たちには残されていないので、正確には判らない。

だが、この長い沈黙がどういう性質のものであったにせよ、僕たちはこの 6 年の間にフォークナーが遂げた大きな進歩を認めることができる。彼が『サートリス』*Sartoris* 以来常に真摯に求めながら遂に克服することが不可能かに見えた、数々の問題は、この『墓場への闖入

者』(以下『闖入者』と略す)に至って、見事に且つ極く自然に解決されているからである。

今僕は数々の問題といったが、究極的には、これらの問題は個人対社会という問題に包括されると思う。つまり、一人の個人の善意が大きな社会機構の中でどのように有効に働き、何を齎らすことができるのか、といった問題である。20 世紀という時代に生きながら人間救済を希う者は、やがて不可避免的にこの難問題に行きつかなければならない。事実フォークナーは、先ず個人の善意(誠意)そのものの吟味から始めて徐々に、この個人対社会という問題に目を向けて来た。そしてこの作品の前の『モーゼよ、往きて下れ』(以下『モーゼ』と略す)では、この問題に一気に解決を与えようとした。そして失敗した。この失敗は次のようにして起った。アイクは先ず、森に入ることによってヒューマニズムの何たるかを学んだ。彼はそれを人間社会に呼び込むことによって、人間性の社会における回復を夢見たのであったが、社会の外に身をおいた彼のヒューマニズムは、所詮森にだけしか通用しないヒューマニズムであった。つまり、アイクの敗北は自分が高い犠牲を払って得たヒューマニズムを、遂に社会の指導原理にすることができなかった時に起ったのだ。こ

のことは、もちろん、フォークナー自身の力の限界を示している。この難問題に突き当たって往き暮れてしまったフォークナー自身の姿を示している。『モーゼ』では、彼が求め来たった倫理体系は、遂に森の中に埋没されたかに見えた（詳しくは「ワセダ・レビュー」第4号 拙稿参照）。

だが僕達は、フォークナーが自己に忠実な、つまり道徳的な、そして真摯な作家であることを知っている。僕達は当然、彼がこの挫折からどのようにして立ち直るかを期待して、次に続く作品を読む。実際彼は、常にこのようによけたり、躓いたりしながらここまで辿りついているのだ。『サートリス』によって定着の基盤に辿りつくまでの彷徨時代はいうまでもなく、『サンクチュアリ』でベンボウを失った時も、『パイロン』のレポーターを失った時も、彼はなお前進し克服する意欲を持ちつづけた。そして僕達がここで彼に期待するもの、それはいうまでもなく、あのアイクが往き暮れた陥穽をどのように避け、あるいは克服して——つまり、社会の中に踏みとどまりながら、アイクが持つに至ったあの純粋なヒューマニズムを、社会を構成する他の人間に拡散させ、それを社会の指導理念にまで昇華させることができるかを、僕達に見せることであった。

僕が先刻この作品で彼が係わり合って来た問題が見事に解決されている、といったのは、まさにこのことを指しているのだ。この時期のフォークナーは、この問題さえ解決されれば、彼が長く求めて来た倫理体系に点睛を加えることができる、と考えていた筈だ。従って僕もこの小論では、個人の善意（ヒューマニズム）が社会に対してどのような積極的な力となり得るのかを中心に、考えてみたい。だがそのためには、

①アイクが獲得したのと同じヒューマニズムに今度は 16 才になるチック・マリソン (Chick Mallison) がどのようにして覚醒していったのか、②また彼が覚醒の過程において、また社会への働きかけの過程において、どのような指導者（乃至助言者）や理解者を必要としたのか、といった問題にも必然的に触れなければならないだろう。

## II

作品のテーマの分析に入る前に、この作品の形式について少しく触れておきたい。

周知のように、この作品には推理小説に用いられるあらゆる手法が使われていて、これを単に推理小説として読んでも充分読者の興味をつなぎとめるだけの力を持っている。ルーカス・ビューチャム (Lucas Beauchamp) がもし犯人でないとすれば、彼の足元にピストルに射抜かれて倒れ伏すヴィンソン・ゴリー (Vinson Gowrie) を殺したのは一体誰であるのか、また、実際ヴィンソンはどのようにして殺されたのか、チック・マリソンを含む3人が真夜中に教会の墓地をあばいた時、彼らが発見したのは、案に相違してヴィンソンの遺体ではなく、ジェイク・モントゴメリー (Jake Montgomery) のそれであったが、何故そんな事が起ったのか、また、翌朝になって保安官や弁護士スティーヴンスがその墓をもう一度あばいた時、今度は墓が空になっていたのは何故であるのか、などという謎は、この物語の最後の最後まで読者には明らかにされない。こうした物語中の事件だけを追う限り、この作品は推理小説として読まれても、十分にそれだけの価値を持っている。（序ながら、この作品を minor の作品の一つと考えている批評家の多くは、①この作品に見る、この推理小説性が思想を押し潰してい

る、②この作品に見る思想性は、後の『寓話』のそれと比べる時、なおスケールが小さい、という二つの理由を挙げている。しかし僕は、①については事情は全く逆だと考えるし——つまり、主題を明確化するために推理小説の形式を使ったにすぎず、それはフォークナー自身がよく云うように、「作品の主題がスタイルを命令する」からである——また②については、結果的にはそうした批評家のいう通りであっても、彼の思想発展の過程を跡づける場合には、やはり、『闖入者』は大きな意義を持っていると考える。即ち、僕はこの作品での飛躍があったからこそ、『寓話』の生誕が可能になったと考えている。）

この作品が、ただ推理小説として、読者を引きつけるだけのために書かれていないのは、主人公チック・マリソンとその伯父のギャヴィン・スティーヴンス弁護士の哲学的態度、チックとルーカスとの心的葛藤などを想起すれば明らかであろう。所謂普通の推理小説には、こうした煩悶、葛藤などは見られないものであるからだ。従って、この作品が推理小説以上のものとして書かれていることは、この作品に至るまでのフォークナーの関心なり追求態度をまったく考慮しないとしても、作品そのものが十分に証明している。

このように、この作品は、形式上は推理小説の方法を用いながらも、主題の上では、フォークナーが以前から求め、直接には6年前の『モーゼ』で求めたテーマの延長線上に置かれるべきものを追求している、といえるのだ。（このことは、1950年の『騎士の勝負』*Knight's Gambit*の主題についても云い得る。この作品は、

『闖入者』でフォークナーが達した信念を更に敷衍するために書かれている——少なくともそ

ういう結果になっている。ただこの作品の場合は、主題の敷衍であり証明であるにとどまって、そこに思想的進歩がないこと、それに主人公のスティーヴンスがあまりにも全知全能的であること、の二つが大きな欠点となり、作品の価値を減じている。）

さて、僕は急いで主題の方に目を転じなければならぬ。先ず16才の少年チック・マリソンが、『モーゼ』のアイクが達したのと同じような、人間性への覚醒を、どのように成し遂げたのかを見極めることから始めなければならない。

5月の第1週の土曜日（5月7日）にヴィンソン・ゴーリーが殺されるという事件がジェファソンの町で起る。その容疑者としてルーカス・ビューチャムが捕えられる。チックは弁護士の伯父スティーヴンスについて彼を牢獄に訪ねる。スティーヴンスは、金を出すから一つの仕事をしてくれというルーカスの要望を聞くために牢獄に行ったのである。だがスティーヴンスは、「だってお前さん、人にやらせるような仕事は何一つ持っていないじゃないか。獄中にいて、いつ何時あのひどいゴーリーの連中がお前さんをここから曳きずり出して、最初の電柱にてっとり早くお前さんをつるしてしまうか判らないんだゾ<sup>(1)</sup>」と断ってしまう。弁護士は、事件の現場の状況から、ルーカスが真犯人であろうことを、少しも疑ってはいない。そして今の彼の関心事は、犯人が法に則って裁かれること以外にはないのである。法によらずにリ

(1) *Intruder In The Dust*: (Signet Books 1960, p. 42) "Because you aint got any job to offer anybody. You're in jail, depending on the grace of God to keep those damned Gowries from dragging you out of here and hanging you to the first lamp post they come to..."

ンチによって、犯人が裁かれることのないよう見守ることだけである。黒人が法を犯す時、その黒人の受ける罰はリンチである、というのが南部社会の掟であり、それに対しては白人も黒人も慣れており別に悪感情や違和感を抱いてはいないが、弁護士である彼はリンチによってではなく、何処までも法によって罪の償いがなされることを願っているのである。

弁護士がこのようにルーカスが真犯人であると信じていることは、ルーカスにも充分判っているのに、彼は事の真相を弁護士にはまったく話さない。仮りに話したところで、それを弁護士が信じる筈がないことを、ルーカスは知っているからだ。

だが若いチックは、正義と真実を求める者のみが持ち得る、真情といったものを、ルーカスの瞳の中に読み取る。そこで一旦伯父について獄外に出た彼は、ルーカスにタバコの袋を届けるという口実をつくって、単身牢獄に引き返して、ふたたびルーカスの前に立つのである。その時、ルーカスははじめて、墓場に行って埋められている奴を見て来て欲しい、そのわけは、自分の持っているピストルはコルト 41 口径だが、ヴィンソンが殺されたのは違った口径のピストルであったからだ、と真相解決への第一の鍵をチックに与えるのである。

ここで僕達にとって問題なのは、事件の真相を追求することではなくて、チックの心の動き、真情といったものをさぐることである。ルーカスの目の中に、彼を再び獄中に引き戻すだけの力を読みとったのは、彼の心的状態に何が起っていたからであったのか、また、その心的状態はどのような経過を経て得られたのであったのか、などといった問題なのだ。ここにこそ、彼がどのようにしてヒューマニズムに目覚

め、またそれがどのようなものであったかを、解く鍵がある。

彼がはじめてルーカスを見たのは、この事件より 4 年前の、彼がまだ 12 才の時であった。エドモンズ (Edmonds) ——ルーカスは彼の農園に自分の土地を持って住んでいた——の招きで、彼は友人のアレック・サンダー (彼と同年輩の黒人の少年) と 2 人で、ある寒い冬の日、エドモンズ農場の近くに狩猟に出かけるが、彼は途中で丸太橋を渡ろうとして、冷たい川に転落した。その時ルーカスが通りがかって彼を救うが、彼は先ずその時に最初の屈辱感を抱いたのだった。白人の彼がぶざまにも川に転落し、それを黒人が横柄にも救い上げたのだ。だがそれだけならまだしも、彼を救い上げたルーカスは、堂々と彼を自分の住み家に連れて行き、彼を食事でもてなそうとしたのだった。白人の彼は、黒人のルーカスから主導権を奪えない儘、おめおめと黒人のいう通りになってしまったのである。彼に有無をいわせぬルーカスの堂々さを憎み、同時に自分自身の不甲斐なさを腹立たしく思った。そして彼は、この屈辱感からの解放を、彼が食べた食事に対して金を支払うという行為によって、果そうしたのであった。ルーカスを黒人としての位置に落し、白人としての自分の優位性を奪回しようとしたのだ (「僕たちは、彼を先ず黒ン坊にさせなくちゃいけない」<sup>(2)</sup>)。だが、それは、彼にとって一層惨めな結果を齎らすにすぎない。彼が差し出した金は受け取られず、いよいよ強く屈辱感をかみしめながら、止むなく金を床の上に落さなければ

(2) *Ibid.* p. 14. "We got to make him be a nigger first."

ならない。ここに至って彼等2人の優劣関係は決定的になってしまう。少なくともチックの側からは、そういうことができる。彼は、ルーカスを「男としての自分だけでなく、白人という人種全体をはずかしめた男」<sup>(3)</sup>と見做して、この事件の起る日までの4年間、何とかしてこの屈辱感からの復讐を企てつづけていた。そしてその度に敗北していたのだった。

つまりここに見るチックの姿は、南部規範を全面的に受け入れている者のそれである。土地私有制度と奴隷制度の上に築かれた、南部の伝統的な考え方が、そっくりその儘彼の中に認められる。白人は黒人より偉く、立派である、黒人は黒人らしくすべきである…等々。しかしこのように南部の規範を何らの疑念もなく受け入れていた12才の時の態度と獄中のルーカスの目の中に何かを読み取り、それを無視し得ない16才の時の態度との間には、大きな距離がある。黒人ルーカスの目の中に無視し得ないものを感じるのは、チックが黒人を人間——少なくとも彼自身と平等なもの——として認めたことを意味している。墓場をあばくようにルーカスから云われた時、彼はじっさい次のように考える。

（「この僕に、そこに行って墓をあばけだっ  
て？」）彼はもうその時、なる程これが俺が  
肉と野菜とを食べたことに対する代価なの  
だ、などとは考えていなかった。そんな考え  
はもうとっくに、つまり何か——それが何  
だか判らないが——5分程前に彼をここに釘  
づけにしておいて、彼と年老いたこの黒人殺

(3) *Ibid.* p. 16 ... who had debased  
not merely his manhood but his whole race  
too;...

人者との間に横たわる、広大で、殆んど超えることのできない程の断絶を振り返らせて、そこでルーカスが彼に向って何かを云っているのを見たり聞いたりした時に、なくなってしまった。ルーカスが彼に向って何かを云ったのは、彼がチャールス・マリソン二世であるからでもなく、また野菜を食べ、火で体を温めたからでもなく、<sup>(4)</sup>あらゆる白人のうちで彼一人だけは、この瞬間とロープに繋がれて独房を追い立てられることがあるかも知れないその瞬間との間に、話す機会を持ち得るし、彼（ルーカス）の目に宿る、決して期待はしていないが是非やってほしい、という暗黙の声を聞いてくれると思ったからだった。<sup>(5)</sup>

これは、もはや規範に盲目的に従っている者の姿ではなくて、自分の良心の声を無視し得な

(4)これは、チックが12才の冬、川に落ちた後でルーカスの家で食事をし、体を温めたことをいっている。

(5) *Intruder In The Dust*: p. 46~47  
("Me go out there and dig up that grave?" He wasn't even thinking anymore *So this is what that plate of meat and greens is going to cost me.* Becasue he had already passed that long ago when that something — whatever it was — had held him here five minutes ago looking back across the vast, the almost insuperable chasm between him and the old Negro murderer and saw, heard Lucas saying something to him not because he was himself Charles Mallison junior, nor because he had eaten the plate of greens and warmed himself at the fire, but because he alone of all the white people Lucas would have a chance to speak to between now and the moment when he might be dragged out of the cell and down the steps at the end of a rope, would hear the mute unhoping urgency of the eyes.

い者のそれである。つまり、彼は、先の文に従えば 5 分ほど前に、突如として人間性に目覚めたのだ。彼は 4 年の間屈辱感を抱きつづけて来た。そしてルーカスが牢獄に繋がれて彼に情を求めて来たこの機こそ、復讐を果す千載一遇の好機になり得た筈である。だが彼は、そこに復讐の相手である「黒人」を見ずに、一人の哀れむべき「人間」を発見してしまった。この人間性への目覚めは、この日突如として起ったが、もちろんそれに至るためには、4 年という長い、屈辱感に彩られた試練の期間が必要であった。つまり、彼の人間性覚醒への道は、彼がそのことを意識したかどうかは別にして、ルーカスその人によって準備されたものなのだ。皮膚の問題を超越し 1 個の人間として雄々しく生きる混血のルーカスの態度の中にこそ、チックは人間のあるべき姿を読み取ったのである。チックを『モーゼ』のアイクだとすれば、ルーカスは、アイクが師と仰いだサム・ファザーズ (Sam Fathers) であったといえる。

だが、チックが到達したこの地点は、『モーゼ』のアイクが既に 6 年前に達し得た地点にすぎない。そこに到達する経緯は違っていても、結局一人の少年がヒューマニズムに目覚めたという点では、まったく同じで、二人の間にヒューマニズムの質的相違はない。問題はこれから先である。つまり、アイクが失敗した処をチックがどのように回避し、あるいは克服して、遂に彼のヒューマニズムを社会の中に融け込ませたか、という問題であるが、その前に、チックをヒューマニズムに結びつけたルーカスの人となりについて見ておくのが順序であろう。彼は作品の中で重要な人物であると同様、フォークナーにとっても、彼の黒人に対する理想を具現

する重要な人物でもあるのだから。

彼は、南部伝統の祖ともいべきキャロサーズ・マキャスリン (Lucius Quintus Carothers McCaslin) が黒人の召使 ユーニスに生ませた子の後裔で、体内に 8 分の 5 ほど黒い血を持った混血の男であるが、南部では、ほんの僅かの黒い血を持っていても、黒人と分類されるので、彼は紛れもない黒人 (negro, nigger) なのである。従って、彼は、黒人として働き、考え、行動することを、生活のすべての分野で要求される。だが彼はあらゆる点で黒人の生活規範を無視する。彼は、白人が持ち歩くような、立派な金製の時計用の鎖と、同じく金製の爪楊枝を持っているだけではない。炬造りの上に置いてある彼等の新婚写真にも、妻のモリーは、労働する黒人女の象徴である頭布 (headrag) をつけてはいない。モリーは、そうした規範からの逸脱を好まないが、ルーカスは「俺は自分の家の中には、野良で働く黒人坊の写真は要らなかったのだ」<sup>(6)</sup>とその理由を説明する。ジェファソンの町に出て来るにも、黒人が出歩く週末を避けていたのである。だがこのことは、彼が 8 分の 3 ほど持っている白い血を殊更に誇示して、他の黒人たちを軽蔑していたからではない。「俺はマキャスリン家の一人だ」<sup>(7)</sup>と叫ぶのも、白人社会に対する反逆だけを意味するのではない。反逆の気持が少しはあるにしても、それ以上に、皮膚の色を超えて、人間であるという自覚が彼には遙かに強いからだ。この認識は次のようにして得られた。即ち、彼が 8 分の 5 の黒い血を持っていると同様、白い血も 8 分の 3 ほど持っているのであるから、白人

(6) *Ibid.* p. 12. I didn't want no field nigger picture in the house.

(7) *Idid.* p. 15. I'm a McCaslin.

としての権利と平等もある程度——少なくとも 8 分の 3 ——与えられて当然である（第 1 段階）。白い血を持ちながら一方的に黒人と認められるのは理窟に合わない。第一白と黒の 2 つの規範が存在し得る絶対的な理由はまったくない。今迄それが存続したのは、単に人為的、かつ社会的な理由に他ならない（第 2 段階）。それが人為的なものである以上、今度はこちらの行為でもってそれを変更し改善していくことは可能な筈である（第 3 段階）。つまり、ルーカスは、白い血と黒い血とを併せ持つという、それまでの多くの作品の主人公達が破滅する最大の原因であった、こののっぴきならない条件を逆に利用し、そこから積極的な価値を造ったのである。彼が、たとえば『八月の光』のクリスマスと根本的に違っている点は、一方が 2 つの規範の亀裂の中に落込んでそこに往き暮れてしまったのに反して、他方はその亀裂を積極的に利用して、新しい価値を創造した処にある。

尤も、現実の中にあって、こうした生き方をすることは、多くの犠牲と危険とを彼に強いる。このような黒人は、白人にとっても厄介な存在であり、同時に黒人社会にとっても危険な人物となる。それだけに白人社会からの風当たりも強いし、黒人の間にも友達ができにくい。この事件の場合のように、生命の危険にまで曝されることもあり得る。それでもなお彼は、そうした「傲慢」で、孤高な生き方を止めないのだ。それは、無批判に白人の生活規範を尊敬しているからでもなく、また黒人規範に対する劣等感の裏返しからでもない。それは、彼が黒人であり白人であるよりも、先ず人間であろうとしたためであって、彼はそれを行動で以て示したのだ。

なお、僕は先刻この人物はフォークナーにと

っても、黒人に対する理想を具現する人物であるといったが、その意味は、現実の南部で今なお繰り返されている白人と黒人とのいがみ合いを解決するためには、白人が物の考え方や生活様式を大幅に変えなければならないのはいくまでもないが、同時に黒人の方でも、今迄の<sup>かたくな</sup>で卑屈な態度を捨てて、もっと人間的にならなければならない、としてその一つの理想像をルーカスに描いたものだ、ということである。フォークナーの文学の中で、ルーカスは、いろいろな意味で重要な人物であるが、特に黒白問題に関する限り、決して無視されてはならない人物の一人なのである。

さて、個人の善意がどのように社会と結びつくのか、という問題に立ち向う準備が僕には漸くできたようだ。

彼がアイクと根本的に違っていたのはどの点であったのか、彼の人間性が社会を変えていくのはどのようにしてであったのか、そしてそれは何故か、といった問題を見極めるのが最後の課題でなければならない。

2 人の少年の根本的な相違点——それは、端的にいってしまえば、一方が先祖伝来の土地家屋を放棄するという逃避の姿勢を取ることにより、社会の枠外にわれとわが身を置いてしまったのに比べて、チック少年は、先ず勇氣と次にその勇氣に相応しいだけの行動力とを持って、積極的に、自分の良心の声に従って、実践したところにある。黒人の言葉を信じて、他人の墓をあばくことが、どれだけの勇氣と実践力とを必要とするかは、云うまでもない。僅か 16 才の少年が、ゴーリーの身内が森蔭に潜んでいるかもしれないという真夜中に、9 マイルの道程を旅して、墓をあばくのである。彼は、もち

ろん、この仕事が齎らすとてつもない困難さ、恐怖、不安と、それでも「やるべし」という良心の声との、激しい相剋に悩む。それが耐えられなくなった時、彼は伯父スティーヴンスの力の中に逃避しようとさえするのだ。そして断られると今度は自分の無力さにも悩むのである。口実をもうけて、この仕事を回避しようとさえ考えるほど、追いつめられた気持ちにもなる。だが、結局彼は自分の良心を偽ることができなかった。この時の彼の心にはもうルーカスという黒人はなくて、彼はいわば自己の心との闘いを続けていたのだ。

このように端的にいつてしまえば、2人の少年の根本的な違いは勇氣と行動力との有無にある、という極く簡単なことになる。これほど簡単なことが、どうしてももっと早くフォークナーの作品に現れなかったか、不思議に思う人もあろう。だが、一人の作家がある事柄やある思想を作品に描く場合には、作家側にはあらかじめその事柄や思想についての深い認識がなければならぬ。個人対社会というような大問題の場合には、フォークナーは己れに対してどんなまやかさも許せなかった筈なのだ。つまり、彼の心的経験の中で、こうした問題が勇氣と行動力という分母によってきれいに割り切れ、その答えが社会と結びつくには、それ相当の年月がかかった、といえるのだ。

ところで、では、チックが勇氣と行動力とを持ったことで、彼は社会に対して何をすることができたのであったか。

彼の行動は、まず、規範乃至慣習という殻に包まれて、良心を忘れてしまった社会の連中にもう一度良心を思い出させるきっかけを作った。墓をあばくという行為は、つまり過去における白人の罪、横暴さ、不義不正、及び黒人の

犠牲、忍従、などあらゆるものを白日の元に曝したのだ。すべてを、自分の良心によらずに、規範や慣習だけで断定していた彼らは、否応なしに、この白日の元に照し出された真実を見せつけられた。そして彼らは、そこに無数の罪の表象を認めないわけにはいかなかった。そしてヴィンソンは、ルーカスによってではなく、実はヴィンソンの兄クロフォード (Crawford) によって射殺されたことが判った時、彼等の内部には決定的な質的变化が起るのである。リンチに架担しようとしてビート・フォー (Beat Four) からジェファソンに出て来ていた連中が逸早く町を去っていったばかりではない。リンチを見物しようとして集って来ていた多勢の群衆も、一様に申し合わせたように町を去っていく。その理由は、もはやリンチが必要でなくなったからではもちろんない。それは、スティーヴンスの言葉を借りていえば、「彼等は自分自身から逃れようとした」<sup>(8)</sup>からだ。もしチックの行為がなかったならば、彼等は、今迄多くの黒人をそうして来たように、今度もルーカスというもう一人の人間の無実の命を奪ったことであろう。彼らは、このようにして、幾世にもわたって、黒人を無実の罪で虐げ、殺めて来た。大罪を犯し続けた自分たちに激しい愧らいと悔悟の念とを彼等は抱くに至った。ここに至って彼等も人間性に目ざめた、といえるのである。

ルーカスからヒューマニズムと勇氣とそれに行動力とを学び取ったチックは、いわば自分が社会の核となって、徐々にではあるが、しかし確実に社会をヒューマニズムのレベルに引き上げた。だが、このことはチック自身の心にはまだ明確に意識されていない。彼の行動の意味が

(8) *Ibid.* p. 131. They were running themselves.



正確に認識されていないのだ。彼とアレック・サンダー及びハーバーシャム (Eunice Habershams) 老嬢が取った行動の本当の意味を正確に理解し、認識するには、伯父のスティーヴンスの分析力の助けを借りなければならない。彼等2人は、長い議論を繰り返しながら、チックの行動の意味をさぐるのである。この議論は、スティーヴンスに対しては、どんなに人間性に目覚めていようとも、彼自身の場合のように、それが行動に現れない限り何の力にもなり得ないことを悟らせた点で有用であったが、チックに対しては、このたった一つの行為が、単に南部を破滅から救うためだけでなく人間そのものを救済するために、もっとも大切な出発点であることを悟らせた点で、より有用であった。

だが、僅か 16 才の少年が、いとも簡単に社会を変え得るのは、どういう理由によるのだろうか。それは、社会を構成する他の人間も、本当には心の何処かに人間性を失わず持ち続けているからである。つまり人間性は、決して獲得（というよりは再発見）の難しいものではなくて、僅かの自己観照で、たとえばチックの行動を垣間見たり、ルーカスが案に相違して殺人犯でなかったということだけで、獲得（再発見）し得るものなのだ。人間性とは、人間が存在し始めたその最初の瞬間から失わず持ちつづけているものであるからである。ここにフォークナーの人間性に対する深い信頼を読み取ることができる。所謂彼の人間性不滅のエッセンスをここに見る。が同時に、人間はそうした人間性を、ある状況の元で、忘れかけることもあり得る。フォークナーがスティーヴンスをして、南部の同質性 (homogeneity) を北部から守らなければならない、と云わせる時、それは、機械文明が人間性を失わせつつある悲しい現実か

ら、まだ南部に豊かに息吹いている人間性を守らなければならない、といているのである。この北部とは、具体的な北部ではなく、形而上学的な北部であることはいうまでもない。

### III

フォークナーが永く求め来たった個人と社会との和解は、この作品において、はじめてその可能性を見せはじめた。幾多の作品でこの和解を真摯に求めながら、常に個人の敗北を認めざるを得なかったフォークナーは、この作品を書き上げることによって、彼が自己に課して来た使命が漸く終末に近づいたことを、得もいえぬ安らぎと満足感とを味わいながら、感じたことであろう。個人と社会との和解、それは個人が真にヒューマニスティックな勇氣と行動とを持つこと、そして社会には、いかなる条件の元でも結局そうした人間性を失わない人間が多数いるという事実、という2つの要素によって、成し遂げられる。社会が常に個人を圧迫する宿命にあることは、誰よりもフォークナー自身が深く認識している。それなればこそ一層彼は、個人の「勇氣」(courage) を、「忍耐」(endurance) を、そして「艱難」(sufferance) を、声を大にして叫ぶのである。個人の行為は、その個人がこうしたヒューマニズムに基く徳を持った人間として持ち堪えることによってのみ、社会に作用を及ぼすことができるのである。ルーカスとチックは、まさにこうした徳の実践者であった。チックから、『寓話』の伍長が生れて来るには、もうそれほど距離はない。

(1966・8・15 山陰の浜にて)